簡易小學讀本

木澤成肅
丹所啓行
編輯

五

275
6
388

大日本教育會古籍館
二函
三架
三號
六冊

検定申請本

K120.8
5
5

K120.8
5
5

木澤成肅
丹所啓行 編輯

簡易小學讀本

巻五

東京 二書堂藏梓

No. 5050

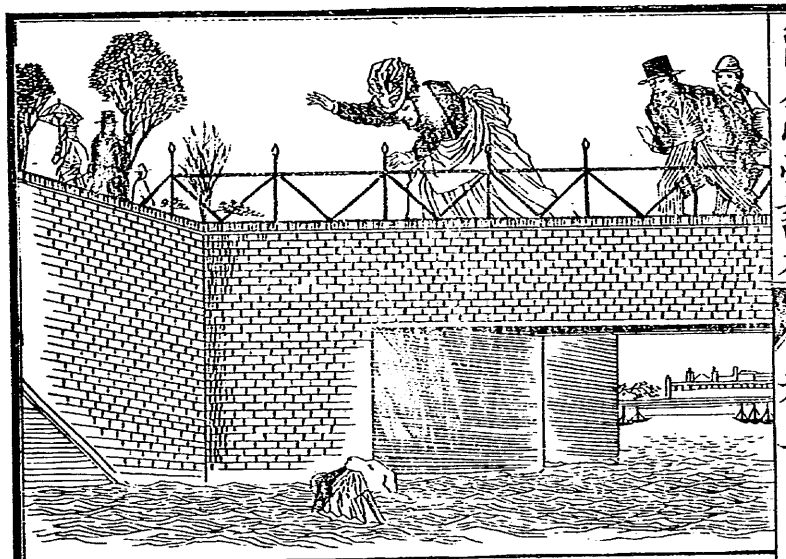
簡易小學讀本巻五

東京 木澤成肅
丹所啓行 編輯

第一課 良犬。

①西洋ノ或國ニ。多ク大ナル犬ヲ養フ。此犬ハ生來善良ニシテ。能ク人ノ用ヲナスコトアリ。

○或家ノ乳母。一日小兒ヲ抱キ。橋上ニ



立チ臨ミ見シガ。其兒懷ニ在リテ。喜ビ躍リ。乳母過チテ水中ニ落トセリ。驚キ騷ゲトモ。水深クシテ。入ルコト能ハザレバ。兒ハ水ニ溺レントス。

○時ニ橋ノ傍ニ良犬アリ。跳リテ水中ニ入リ。小兒ヲ口ニ啣ヘ來リテ。乳母ニ與ヘタリ。若シ犬ノ救フニ非レバ。小兒ハ死スベキ所ナリシ。

第二課

地球。ちきゅう。

○汝等の住居する世界は。其形圓くして。殆ど橙の如し。其表面は。水と陸とよ

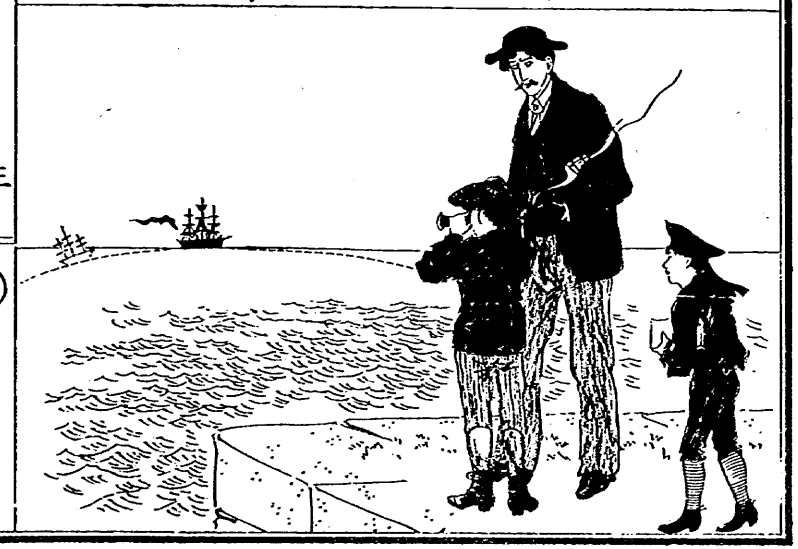
り成り。陸よハ許多の國々なり。

○今世界ハ圓き證據をあぎんよ。人海岸に立ち。遥に船の去るを見るよ。最初は船身隱れ。次に帆檣の下邊より次第よ隱るゝを見るべし。

○若し船ハ全體を。見る可らざるよ至り。高邱よ登りて之を見きバ。再び此舟を見るを得べし。

○是地球ハ。圓體あるゆゑ爲めよ。海面も亦圓體をなし。其高處よ船の隱れて見えずなりゐるなり。

○又某の港より船を發し。西よ向ひて止まざきバ。再び發



せゝ港ゟ歸るべし。是皆地球ハ圓ゐる
ゟ知るゟ足れり。

第三課

子寶。子寶。

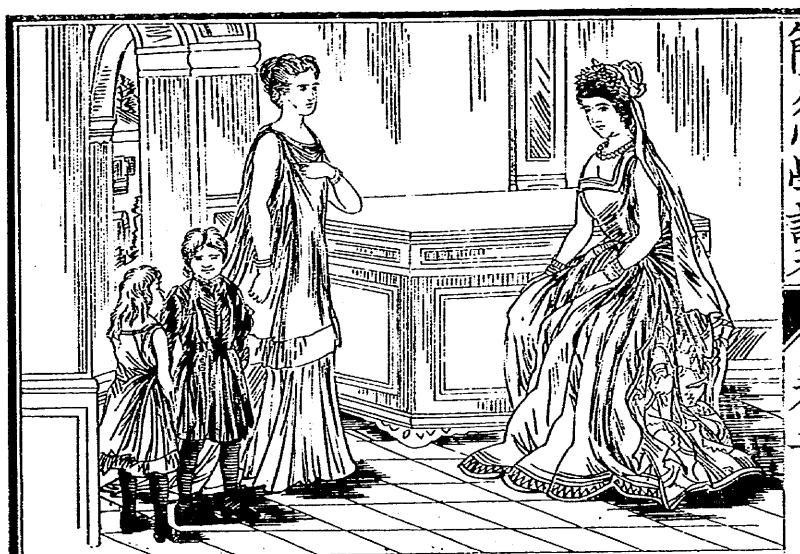
○西洋ニ。富豪ノ夫人アリテ。常ニ錦繡
珠玉ヲ身ニ纏ヒ。衆人ニ賞メラレンコ
トヲ好メリ。

○或日羅馬ノ奥方ヲ尋ネシ時。己ノ裝

ヘル珠玉ヲ自慢ラシク見セ。其價ノ高
キ事ナドヲ話シヽニ。奥方ハ別ニ之ヲ
賞メザリキ。

○夫人ハ奥方ニ向ヒ。貴方(アナタ)ノ寶玉ヲ。見
セラルベシト望ム。奥方承諾シ。暫ク待
チ給フベシトイヘリ。

○時ニ奥方ノ產ミシ兒二人。學校ヨリ
歸リ來ル。奥方即チ二兒ヲ。夫人ノ前ニ



出ダシテ曰ク。是コソ吾ガ寶玉ニテ候ナリトイヒタリシ。

○人ノ子タル者勉メ學ビ。父母ニ善ク事フル時ハ。父母ヨリ視テ。寶玉トセラルベシ。若シ學業ヲ怠リ。父母ノ心ニ違フ者ハ。決シテ寶玉トセラレズ。石瓦ニ劣ルモノトイハルベシ。

第四課

雨。雨。

○雨は素地上の諸水。熱乃爲めに蒸されて。水蒸氣となりて。空中に騰り。再び冷ひて降り來るものなり。

○春降る雨を春雨といふ。草木之が爲めに養はれ。芽を出だし。花を開く。夏は夕立とて。急に降り來て。又急に止むこと屢〻多し。

夕立の歌　夕立の歌。

植付し田畠乃稲も去年枯れて。
旱天なやみ人々に。
あらゆる汗は流るれども。
小川乃水はかれにけり。
稲城をくいんでだ字ぞ。
時に空をさし来る遠山の。
峯に立ちくる雲の色。
見る間に空はくもりそめ。

光るいかづちなるるみ乃。
聲ハ地上ニ響ケ。
車乃軸を流れべき。
雨も降り来て夏の日ハ。
暑さ忘れ洗ふ夕立て。
なやむ人々ハ涼しがり。
卧しこ法稲も起き直り。
今年もこの里よろこらんと。

よ涼ふ者民の住む里ハ。
夕立雨降ル神ハ為まを乃。

第五課

梟ト鳩ノ話。梟と鳩の話。

○梟アリ其巣ヲ去リ他處ニ徙ラントシテ出デ行ケリ。偶々途中ニテ鳩ニ逢フ。鳩ノ曰ク。汝何レニ行カントス。梟曰ク。我ガ鄉人大ニ我ガ鳴ク聲ヲ惡ム。故

ニ他處ニ徙ラントスルナリ。

○鳩曰ク。汝人ニ惡マルヽコトヲ厭ハバ。何ゾ鳴クコトヲ止メザル。汝若シ鳴クヲ止メザレバ。何レノ鄉ニ行クトモ。

誰カ厭ハザル者アランヤト。誠メケレバ。梟ハ漸ク去ルヲ止マリ。鳩ノ言ニ服セリ。況テ人ハ言語ヲ慎ムベキナリ。

第六課

尺度の用。

尺度の用。

○母上よ此帶は。何尺ありや。

○娘よ其帶の寸尺ハ。人よ問はゞ。

知るべき具あり。汝自ら計りて見よ。其

具は。尺度（モノサシ）といふをもちゐる。

○尺度の目は先づ十釐を一分といひ。十分を一寸といひ。十寸を一尺といふ。十尺を一丈といふ。其帶の寸尺も此具

にて計らば。知るを得べし。

○尺度は二種あり。織物等を計るは呉服尺を用ひ器物を計るには。曲尺を用ふ。

○木綿は。凡そ二丈六尺を一反とし。絹は。凡そ二丈八尺を一反とす。二反ゆゑ裁ちてそのまゝ一匹といふ。此一匹を裁ちて製するれば。通常の衣服二つもある

なり。

第七課

地理。地理。

○今汝等ハ。何處ニ立テルヤ。學校ノ遊歩場ナルベシ。其遊歩場ニ立チ居テ。見ル所ハ何物ゾ。

○近キニハ。學校アリ。村アリ。林アリ。遠キニハ山アリ。川アリ。海アリ。是皆地上

ニアルモノ、。目ニ見ユルモノナリ。

○凡地上ニアルモノニ自然ニ出來タルモノト。又人ノ作リタルモノトアリ。其名各異ナリテ。自然ニ出來タルモノ

ハ。山。川。海。等ナリ。人ノ作リタルモノハ。町。村。國。等ナリ。

○商家ノ集リタル所ヲ町ト云ヒ。農家ノ多キ所ヲ村ト云ヒ。町村等ヲ合セタルヲ郡ト云ヒ。郡ヲ合セタルヲ國ト云フ。國中ノ最モ繁華ナル地ヲ都會ト云ヒ。政府ノアル地ヲ首府ト云フ。我ガ國ニテハ東京ヲ首府トナス。

第八課

東京。とうきょう。

○東京ハ。其廣サ凡ソ東西三里。南北四里ヨリテ。中央ニ皇城アリ。城外ヨハ。大小ノ市街櫛比シ。人口凡ソ九十餘萬アリテ。商工ノ業甚ダ盛ナリ。

○此府ノ東ヨ川アリ。上流ヲ。隅田川トいフ。下流ヲ。大川ト稱ス。六大橋ヲ架セ

る。此川ハ東京灣ヨリ通ずる船以て。大に運漕の便をなす。隅田川の東岸ヨリ。許多ニ櫻樹を植ゑあり。

○皇城の東北ヨリ方て。上野公園なり。

園中櫻樹多く。花時ハ都人群遊す。園内ニ博物館ありて。古今の物品ハ陳列す。又動物園ありて。珍禽奇獸を畜ひ。皆人をして之ハ縱覽せしむ。

○東京より發する。鐵道ニ停車場ハ東ニ在るハ上野。東南ニ在るハ新橋なり。

第九課

三韓征伐。

三韓征伐。

○神功皇后ト稱スルハ。仲哀帝ノ皇后ニシテ。應神帝ノ御母ナリ。躬ラ舟師ヲ率ヰテ。三韓ヲ討チ。遂ニ之ヲ服セシメタリ。

○三韓ハ。我ガ國ニ服從セシ以來。色々ノ物品ヲ貢シ來ル。

其二

仲哀帝乃御時ノ。熊襲ト云フ國ノ賊ノ。叛逆シ故ニ。仲哀ハ。御師ヲ起シ討ち給フ。其功モ立ち給ヒ中。崩シ給ヒ皇后ハ。

大臣武内宿禰の議を決し。
男子乃至子を裝束す。
熊襲乃根據地を頼とす。
荒海隔川三韓を。
舟師を率ゐて攻め入りしに。
新羅の王は皇后の。
威風に恐れ従ひ奉る。
金銀彩帛八十艘。

年々貢ぎ事に極る。
高麗も百濟も帰服して。
舟師に面す筑紫灣。
敷田を市里に定て應神に。
產ませ奉る皇子に立て給ふ。
政事を攝事聽き給ふ。
是ぞ神功皇后乃。
三韓討ちしいにしへ事。

第十課

年月。

○三百六十五日ヲ一年トイフ。月ニハ三十一日。三十日。又二十八日ニテ。一ト月トイフモアリ。

○一月。三月。五月。七月。八月。十月。十二月ハ。三十一日ニシテ。四月。六月。九月。十一月ハ。三十日ナリ。又二月ハ二十八日ニシテ。四年目ニ一度ヅヽ。二十九日トナルコトアリ。コレヲ閏年トイフ。

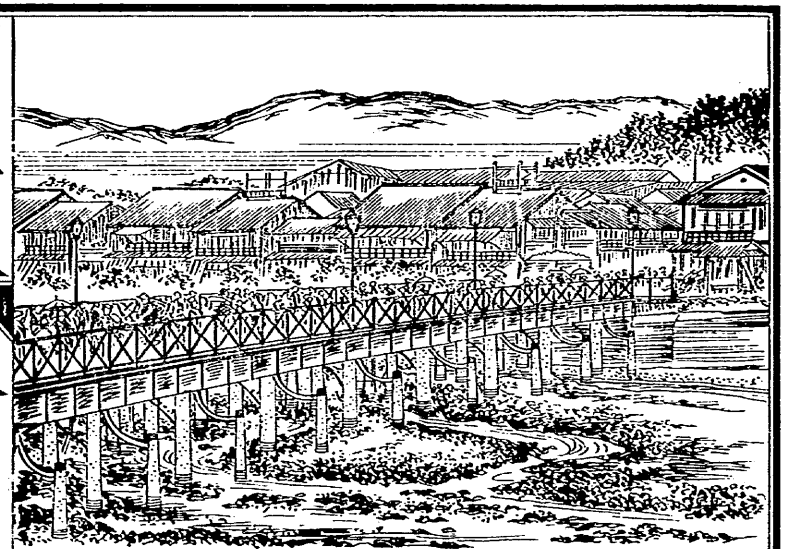
○此年月ノ過ギ去ルハ。甚速カニシテ。幼年ノモノハ。忽チ少年トナリ。少年ノモノハ。壯年トナリ。壯年ノモノハ。老年トナル。故ニ年少キ時ニ。學業ヲ爲サヾレバ。老イテ悔ユルトモ。及ブコトナシ。

第十一課

京都。京都。

○京都ハ。山城の國ニ在りて。桓武天皇以來。明治元年に至るまでの。凡千餘年間ハ帝都ゝなりし。今は舊都とありたまども。猶ほ京都と稱す。東京ハ距ること。百三十一里あり。

○京都の市街ハ。南北ニ稍長く。道路端



正ニして。四方に達す。其中ニ神社佛閣名所古蹟多シ。此都乃北隅ニ方り。御苑と稱する公園ハあり。即ち皇居の在る所なり。又其西ニ二條城あり。市街の東を

總べて東山と稱し。華頂山。祇園。清水等は名所なり。又西北は。北野天滿宮。金閣寺等の名跡あり。就中嵐山の櫻。高尾山の紅葉は。景色最も佳なるが故に。春秋には。文人墨客多く遊觀す。

○又市中に一帶の川あり。加茂川なり。夏時納涼の客群集す。

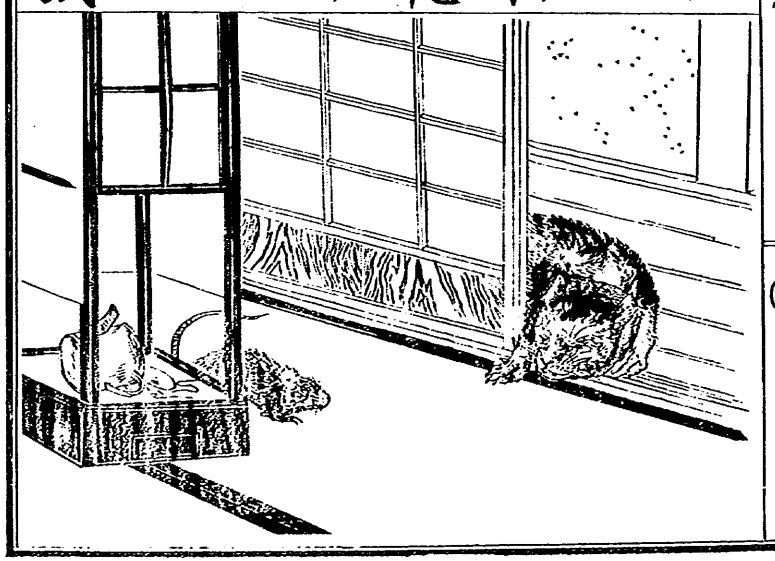
○此地に在る鐵道は。東大津より發し。此都城過ぎ。大阪より神戸に達す。運輸甚だ便あり。

第十二課

老猫ノ思慮。　老猫の思慮。

○寶曆ノ比。中京某ノ方ニ。夜々燈火ノ滅ユル事アリ。某ハ不審ニ思ヒ。一夜之ヲ試ムルニ。夜更ケテ。大ナル鼠出デ。燈火ノ油ヲ舐ルアルナリ。

○依リテ隣家ノ猫ヲ借リテ。之ヲ捕ヘサセントセシガ。猫其鼠ヲ見テ。忽チ怒リ。直ニ飛ビカヽリケルヲ。鼠飛ビチガヘテ。猫ノ喉ニ嚙ミツキ。猫ハ反リテ鼠



ニ殺サレタリ。

○家人大ニ驚キテ。又老猫ノ最モ強キヲ捜シ來リ。彼鼠ニ向ハセタリシニ。猫ハ鼠ノ逃ゲ路ニ到リ。少時白眼合ヒ居タルニ。鼠怒リテ嚙ミツカントセシヲ。猫ハ落ツキ居テ。苦モナク。其鼠ヲ嚙ミ殺シケルトナン。

○人モ沈着セザレバ。終ニ大事ヲ誤ル

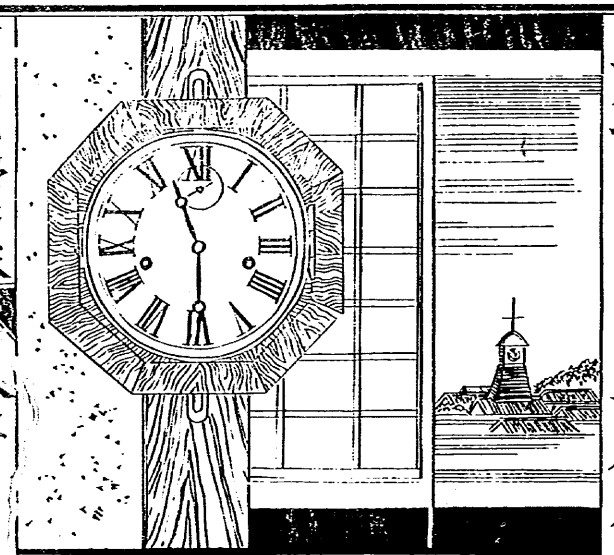
コトアルベシ。

第十三課

時計。 時計。

○大陽中天ニ在リテ。今ハ何時ナリヤ。十二時ナリ。今時計ヲ。十二鳴ル。

○時計ハ。十二時ヲ初メトシ。一時二時ヤ四ツ行キ。再ビ十二時ノ所ニ至ル。夜半ハ十二時ヨリ。正午十二時迄ハ。午



前何時ト云ヒ。正午十二時ヨリ。夜半十二時マデヲ。午後何時ト云フ。午前午後ハ合セテ。一晝夜ト以テ。時計ノ文字ハ。多ク左ノ羅馬數字ヲ以テ記セリ。

I	II	III	IIII	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二

第十四課

伯父。伯母。叔父。叔母。伯父。伯母。叔父。叔母。

○吾ガ父母ノ兄ヲ伯父トイヒ。姉ヲ伯母トイフ。吾ガ父母ノ弟ヲ。叔父トイヒ。妹ヲ叔母トイフ。

○吾ガ兄。弟。姉。妹ハ。伯父。伯母。叔父。叔母。ノ姪ニシテ。吾ガ父母ト。伯父。叔父。伯母。叔母トハ。兄。弟。姉。妹ナリ。

第十五課

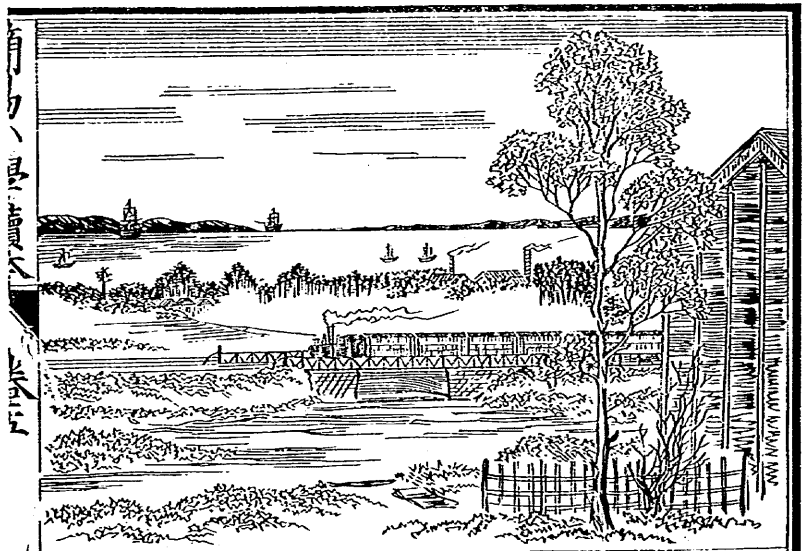
水火。みづ。

○水ハ世界ノ。最モ用多きものなり。先づ我々ハ今日生活シテ。世ヲ渡るの狀を見よ。飲食ハせずくもば。餓え死をるよ至るべし。衣服を着ざれバ。寒暑を凌ぐこゝ能ハざるべし。

○又住居せざるバ。雨露を避くるこゝ

能はぢる爲し。此等の用ゝ充りる。穀物。野菜。肉類。絹。木綿。木材等ハ。皆水ゝ依りて。其成長を助けざるはなし。

○又水ハ。大ゝ工業を助くるものゝ。彼乃水車を見よ。水の力ゝて。大なる車輪を回らし。機關を用ひて。米麥を舂き。小麥粉を挽き。又ハ篩ふ等なり。諸種の業を助くるを以なり。



○水ゝ火を添ふれバ。蒸氣を生ずて。又大なる力を有するものなり。汽車ハ。此力ゝ依りて。數多の車室ゝ。數百乃人を乘せ。速ゝ走るなり。迅速ゝ汽車を。一時

間凡そ十里六町餘を走るやうい。

○汽船は蒸氣の機關を設け。走らしむる船なり。此船ハ。風の順逆に拘らず。走る故に。豫め日限を定めて。海上を旅行するを得べし。汽船ハ。一時間に。凡そ七里十二町餘を過ぐるといふ。

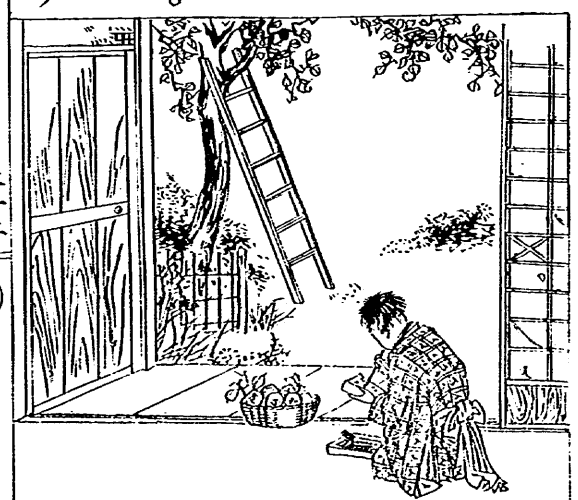
○船や車の外にも。蒸氣機關にて。種々の業を助くるを得べし。此蒸氣機關と

いへハ。釜の内に。水を入れ。火にて。之を沸かし。其蒸氣の力を用ふる。仕掛をいふなり。

第十六課

贈答。

○太郎ノ庭ニ。柿ノ實ヨク熟シタレバ。太郎ノ母ハ。コレヲ



取リテ。太郎ニ與ヘタリ。

○熟シタル柿ノ實ハ。其味ノ甘キモノナレバ。吾ハ之ヲ朋輩ノ二郎ニ分チ與ヘントシテ。左ノ文ヲ作リテ贈リタリ。

手紙を以て申上げ候。扨て私方に柿熟し候間進上仕候也

柿本太郎

栗原二郎殿

○二郎ハ。朋輩ノ深切ナルヲ喜ビテ。早速左ノ返書ヲ認メ。答禮トシテ。栗ノ實ヲ其使ニ渡セリ。

先手紙拝見。陳者柿深山に進み下さる由。忝く存じ奉り候。右に付て栗少々進上致候也

栗原二郎

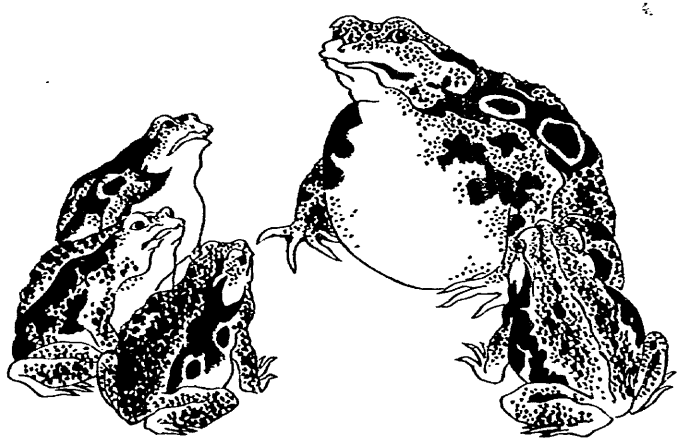
柿本太郎殿

第十七課

牛をまねる蟇。

牛ばまねる蟇。

○一匹ぢ蟇ぢり。牛の身體乃。いやふとくたくましげなる牛羨み。忽ち僭稱乃心を起し。己ぞ身體の小さきぢ牛忘き。世ぢ中ぢて。尤も大いなる獸と呼ぞるゝ。牛乃身體ぢ似きんそのと。頻ぢ身體を膨脹して曰ふやう。請ふ我が朋友よ。



汝等傍ぢありて。能く我ぞ身體を見つめ。吾ぞ體の全く牛の如くぢる牛待ちぢる。其時我ぢ告ぎられぢやと。

○蟇大いぢ氣張りて。腸をふくらせ。之

にても未だ及ばぬやと問へば。猶ほ及ばぬと答へ〻まば。ますゝ我慢し。是よりても及ばぬや。是よりてもこのといひつゝ。終よ己れ乃肚腹を張り裂きくりとゞ。最と憐をむべきも此よ大抵。

○人も身分よ過ぎたる事ゆあせば。こ此蟇よ齊しゝも乃抵かし。

簡易小學讀本巻五終

明治二十年七月十六日版權免許
同　年七月　出版　定價七錢

編輯者　東京府士族　木澤成肅　下谷區下谷西町壹番地
編輯者　東京府士族　丹所啓行　麹町區下六番町四十八番地
出版人　東京府平民　阪上半七　日本橋區本石町十軒店六番地
出版人　東京府平民　石塚德次郎　麹町區麹町三丁目十九番地